

年間指導計画および評価の計画作成にあたって

本資料のねらい

本資料は、令和3年度版 光村図書 中学校「国語」を使用するにあたって、年間指導計画を作成する際の参考資料となることを意図して作成したものである。

令和3年度版 光村図書 中学校「国語」は、学習指導要領に基づき、この基本的なねらいと教科の指導内容を十全に生かすべく作成されている。したがって、国語科の年間指導計画および評価の計画の作成にあたっては、それぞれの学校が、新しい教科書を活用して、学習指導要領の基本的な考え方と国語科の目標をいかに各学校の実態に応じて実効性のあるものにするかという点に配慮されたい。

指導計画の作成について

指導計画の作成においては、教科書の構成や配列を十分に生かすことと、それを各学校・学級の実態に応じてアレンジすることとの両方が求められる。そのためには、教科書の各教材の特性を、想定されている指導内容・学習活動の面で捉え直し、その特性がより生きるように、自校の教育計画と合わせて指導計画を立てていくことが大切である。その際、例えば、次のような観点に立った計画が考えられるだろう。

- 既習の学習経験（小学校での学習を含む）や身につけた力を考慮して
- カリキュラム・マネジメントとの連携を図って
- SDGs（持続可能な開発目標）との関連を図って
- 学校独自の「総合的な学習の時間」との連携を図って
- 他教科との関連を図って
- 学校行事や地域の行事との関連を図って
- 年間を見通した「帯化」した扱いで

評価計画の作成について

評価に関する計画の作成については、計画的に評価活動を実施し、継続的に学習活動全体の習得状況を把握することと、生徒一人一人の学習状況を理解して個に応じた指導の資料として活用することが求められる。

このように考えるとき、評価に関する計画は、指導計画の作成の中に組み入れることが望ましいと考え、本資料の中で例示した。

本資料における評価項目は、学習指導要領の指導事項をもとにして作成した。こうした評価は、単に生徒の実現状況を見るのではなく、一人一人の生徒の成長のためにいかされなければならない。ただし、生徒一人一人に表れる学習状況の高まりや深まりは多様であ

ると考えられるため、ここに示した評価例はあくまでも一つの目安として用いるようにされたい。なお、今回から、評価の観点の5観点から3観点に変更となったことに留意されたい。

配当時数について

学習指導要領では、各学年における領域別配当時数が定められている。令和3年度版「国語」教科書では、この時間数を踏まえて下記一覧表に示したような時間配当を設定している。なお、教材ごとの詳細な配当時数については、「教材配列一覧表」、または「指導事項配列表」を参照されたい。

● 令和3年度版「国語」

領域別配当時数一覧表

1 年						2 年						3 年					
合計 140 (書写 20 時間)		話す・聞く	書く	読む／知・技 (小教材)	学期別合計	合計 140 (書写 20 時間)		話す・聞く	書く	読む／知・技 (小教材)	学期別合計	合計 105 (書写 10 時間) (予備 5 時間)		話す・聞く	書く	読む／知・技 (小教材)	学期別合計
3 学期制	1 学期	7	9	27	43	3 学期制	1 学期	6	10	27	43	3 学期制	1 学期	5	6	23	34
	2 学期	6	12	32	50		2 学期	6	11	33	50		2 学期	6	8	26	40
	3 学期	4	9	14	27		3 学期	3	9	15	27		3 学期	2	6	8	16
2 学期制	前期	8	12	39	59	2 学期制	前期	7	14	36	57	2 学期制	前期	6	7	32	45
	後期	9	18	34	61		後期	8	16	39	63		後期	7	13	25	45
領域別合計		17	30	73	120	領域別合計		15	30	75	120	領域別合計		13	20	57	90

※各表の左上に示されているのが、学習指導要領に示された国語科の総授業時数、右下の数字はそのうち書写および予備の時数を減じた実質的な年間配当時数を表す。